

# 金・女真史研究の最前線に大興奮！

古松崇志 臼杵勲 藤原崇人 武田和哉 編  
金・女真の歴史とユーラシア東方



A5判 348頁  
勉誠出版  
[本体 3,200円 + 税]

古畑 徹

中国を支配した諸王朝のなかで百年以上続いた王朝がいくつあるか、ご存知であろうか。中国的な国号を制定し、皇帝を名のり、数十年にわたって中原を支配したことを前提に数えてみると、漢・晋・北魏・唐・宋・金・明・清のわずか八王朝しかなく、インパクトの強い秦・隋は短命だったし、百年を越える遼・西夏は北・西に偏在し、元は金滅亡後に華北を支配したモンゴル期を加えてやっと百年を越える。

そんな数少ない長期中原王朝にもかかわらず、非常に影が薄いのが金である。同時期に江南に在った南宋や前後に位置する北宋・元の姿が色濃く、「宋元」という表現もあるせいか、今まで日本で刊行された《中国の歴史》シリーズで、題名に「金」が付くのは、杉山正明『疾駆する草原の征服者——遼 西夏 金 元』（講談社、二〇〇五）ぐらいである。専門書も、

つい一〇年程前までは、女真を含めてもほんの数冊、それも主に戦前からの研究者によるものであった。それがここ一〇年のうちに様変わりしつつある。その流れを受けて登場したのが本書で、二三〇冊を越える『アジア遊字』において初めて金・女真の題名がついた記念すべき一冊である。

本書は二四名の著者による、一六の論文と一一のコラム、それに口絵、序言、関係年表、皇帝系図、皇帝一覧から構成された、金・女真史研究の最前線を紹介する論集である。コラムとはいっても囲み記事ではなく、歴とした小論文であり、それらが四部に分配されている。二四名の著者のなかには、金・女真をメインとする研究者だけでなく、その前の契丹史やその後の元朝史・清朝史、同時代の北方史や高麗史を専攻する者もあり、そこには、ユーラシア東方史の長い時間と広

い空間の文脈のなかに金・女真を位置付けようとする意図が見える。『金・女真の歴史とユーラシア東方』という書名は、そうした意図と、金・女真史研究が近年のユーラシア東方史の隆盛の影響下で活性化してきたという研究史的状况の二つを端的に表わす、的確なネーミングだと思う。

以下、掲載論稿を簡単に紹介し、感想・コメントを付すが、紙数に限りがあるので、評者の関心に沿った一部だけの紹介となることをご了解いただきたい。

古松崇志「序言」は、金・女真史の簡単な研究史と本書の関係を明らかにしたうえで、各論文・コラムを端的に紹介して本書の見取り図を示し、さらに本書刊行の経緯と背景に話が及ぶ。本書理解のためにはまず読まなくてはいけない一文である。年表・系図・皇帝一覧は各論文・コラムを読むのに非常に役立つ附録で、巻頭にあるため参照しやすい。

第一部「金代の政治・制度・国際関係」は五論文・四コラムから成り、総論、金朝前女真史、金朝の成立と民族・制度、国際関係のテーマ（テーマ名は評者の命名）順に構成され、テーマごとに論文・コラムのまとめりがある。本部の総論である古松崇志「金国（女真）の興亡とユーラシア東方情勢」は、女真の登場から金滅亡までの金の興亡を、ユーラシア東方史

との関連性のなかで位置付ける概説で、本書総論の役目も果たす。コンパクトでわかりやすく、金・女真に関心のある人にはまず読んでほしい論稿である。

井黒忍「女真と胡里改——鉄加工技術に見る完顔部と非女真系集団との関係」は、完顔部勃興の内在的要因の一つを、渤海時代以来の高度な文化・技術を継承した胡里改<sup>フルカイ</sup>などの非女真系集団の取り込みとその技術、とりわけ鉄加工技術の吸収に求める。かつて日野開三郎の論文を読んで、渤海の鉄と金の興起が関係するという理解はあったが、その媒介役が胡里改だという指摘はすっかり忘れていた。最新の研究成果を踏まえた論述には説得力があり、改めて胡里改の重要性に蒙る啓かれた感がある。

武田和哉「女真族の部族社会と金朝官制の歴史的変遷」(「コラム」) 猛安・謀克については、わかりにくい金朝の制度とその変遷を丁寧に解説し、金朝の具体的理解に非常に役立つ。毛利英介「十五年も待っていたのだ!——南宋孝宗内禪と対金関係」は、南宋二代皇帝孝宗の讓位が金の使者から国書を直接受け取る屈辱的儀礼への忌避感を主要因としたとする説を提起する。考察対象が南宋なので本書のなかでは異色だが、それがむしろ本書の深みになっていて、評者の関心ともシンクロするためか、とても面白かった。

第二部「金代の社会・文化・言語」は四論文・三コラムから成り、社会Ⅱ一論文、文学Ⅱ一コラム、仏教Ⅱ一論文・一コラム、道教Ⅱ一論文、言語・文字Ⅱ一論文・一コラムという構成になっている。これを見ただけでも金・女真史のどこに研究の厚みがあり、どこが手薄なのかがよくわかる。手薄な社会経済史のなか、碑刻史料を活用して華北社会の様相を明らかにしてきたのが飯山知保氏である。本書の「女真皇帝と華北社会」でも、その手法を使い、郊祀覃官（郊祀に伴う大赦の際に平民の老人に軍官階を賜る制度）に着目し、女真の皇帝像をめぐる問題を論じる。その制度的変遷のなかに金の衰亡の様子が具体的に示しているのが、印象的だった。

藤原崇人「金代の仏教」は、契丹と北宋の双方の仏教を継承した金の仏教の特質を論じ、松下道信「金代の道教——」新道教」を越えて」は、この時代に勃興した全真教などの宗派を「新道教」と捉える研究枠組みの問題点を論じる。いずれもクリアーな論稿で、金代の仏教・道教について認識を新たにするところが多数あった。

第三部「金代の遺跡と文物」は五論文・三コラムから成り、都城遺跡、城郭遺跡、土器・陶磁器、銅鏡・官印の順に並んでいる。ここで注目されるのは、中国の金代考古学をリードする趙永軍の「金上京の考古学研究」（古松崇志訳）が掲載さ

れたことと、近年の日本における金・女真考古学の発展をリードする臼杵勲・中澤寛将・高橋宇而三氏の論稿が揃い踏みしたことである。前者では、金上京会寧府をめぐる諸問題と黒竜江文物考古研究所による調査の成果が要領よくまとめられており、後者の諸論稿では、中国東北部からロシア沿海地方の金・女真、及び東夏の遺跡とそこで発見された文物についての最新の研究成果が丁寧で紹介されている。

特に臼杵勲「金代の城郭都市」、中澤寛将「（コラム）ロシア沿海地方の女真遺跡」「金代の在地土器と遺跡の諸相」の三論稿を読むと、ロシア沿海地方における東夏の存在感を強く感じる。東夏とは、金末の一二一五年に蒲鮮万奴が遼東で自立して建国し、のち根拠地をロシア沿海地方に移し、一二三三年にモンゴルによって滅ぼされるまで存続した国である。史料が極めて少ないだけに考古学的な発見の持つ意味は大きく、これら三論稿を読むと、文献だけでは知り得ない東夏の実態が垣間見えてくる。

ちなみに、臼杵論文には東夏の南京に比定される城郭都市として吉林省延吉市東郊の城子山山城の名が挙がっているが、この山城は現在、磨盤山村に名称変更されている。遼寧省にある城子山山城や敦化にある城子山城と混同されやすいからと思われる、実際、中国の百度百科や互動百科の城山

子山城（敦化）の項目に掲げる一部の写真には、遠方に延吉市の高層ビル群が写っており、城子山山城≡磨盤村山城の写真が誤掲載されていることは明らかである。この磨盤村山城からは、高句麗中期〜渤海早期と見られる大型建物群も発見されており、渤海建国の地である東牟山の可能性が浮上してきている。

第四部「女真ジュシェンから満洲マンジュへ」は、二論文・一コラムから成り、金滅亡後から清興起までの女真の姿が概述されている。中村和之「元・明時代の女真（直）とアムール河流域」が金末から明中期まで、杉山清彦「ジュシェンからマンジュへ——明代のマンチュリアと後金国の興起」がポスト≡モンゴル期から清興起までを扱い、二論文を続けて読むことで女真が変化して満洲となっていく過程が理解できる。また、中村論文では東夏や刀伊の入寇も扱われており、杉山論文には金帝国の栄光の記憶が明代女真人に伝承されていたという指摘があるため、第四部を読んだあと、第一部・第三部に戻って関係論稿に目を通したくなる。

本書を通読してまず言えるのは、初めて知ったことや、認識を新たにすることが意外に多く、大いに知的興奮を掻き立てられたということである。渤海史を専攻する評者は、その

延長線上でそれなりに女真・金のことを勉強してきたつもりだったが、それでもこのような状態であった。それだけ金・女真史がいままで知られてこなかったということであり、急速に研究が進展しつつあるということである。

また、掲載論稿は、かなり専門的な論文から概説的・紹介的な文章まで多様であり、かつ論稿間で意見が微妙に異なり、表記が違ったりする場合も存在する。二四名もの著者がいて、それぞれが研究の最前線について述べるのだから、これはむしろ当然で、そこに研究の奥深さや面白さがあり、知的興奮が生まれる。そうした意味で、専門家・素人関係なく金・女真の歴史に少しでも興味を持ったすべての方に、まずは本書を手にとることをお勧めしたい。

（ふるはた・とおる 金沢大学）